属人区長の手紙 (2016年10月)

2016/10/01

愛する皆さん、イエスが子どもたち をお守りくださいますように!

教会が守護の天使の記念日を祝う明 日は、属人区の祭日です。1928年、 三位一体の神が、あらゆる国々と言 語の数知れない人々の間で実りをも たらすようにと、創立者の魂と心に 一粒の種を蒔かれた日だからです。 聖ホセマリアは、天使の聖母の教会 の鐘の音がいつも心で鳴り響き、一 帰天の時まで一、1928年、そして 1930年と同じ強さで、オプス・デイ をする義務を実感させてくれた、と 度々コメントしました。私たちの振 る舞いがこの同じ責任感を表すもの であるよう主に願います。私たち一 人ひとりが〈継続〉なのですから。

「あの小さな種のたとえが実現したのです。主に心から感謝しなければなりません。あの時から何年も経ちましたが、主は、当時わたしたちが見たものや見えていた以上のものを

与え、私たちの信仰をしっかりと固 めてくださったからです。この世界 中に広がった素晴らしい現実、平和 と善、喜びと神の栄光のために戦う 戦闘態勢を整えた軍隊にたとえられ る現実、それぞれ異なった環境で男 性と女性、そして信徒と司祭が行う 神の仕事を目の当たりにしていま す。素晴らしい広がりを見せてはい ますが、その仕事は常に始めること ですから、必然的に時には困難にも 出会います。しかし、この神の仕事 の広がりという現実を前に私たちは 謙遜に頭を下げ、愛の心で神に向か い、感謝せざるをえません。また、 オプス・デイの歴史の最初から共に 歩んでくださった天の聖母にも心を 上げて感謝しなければなりません」

創立者の考察が未だに私の魂に響き渡っています。聖霊降臨に捧げられたオプス・デイ本部のお聖堂で耳にした、ご聖体におられるイエス・キ

リストへの愛に満ちた祈りの言葉を 昨日のことのように覚えています。 また、オプス・デイの新たな年を始 める今も役立ち、改めて希望に満た されます。オプス・デイを始められ されます。オプス・デイを始められ た主が、年の経過と共に、あずイと 私の応えによって、オプス・ださる からです。

1962年の記念日の聖ホセマリアのように、今、私たちも、この教会の〈小さな部分〉オプス・デイでますイでませて、を見て驚嘆していますを見て驚嘆しています。 進展させてくださったび起こったな主でよらがとえができるとを見て変れたのです。「どんな種野球も大きくなり、空の鳥が来でよりも大きくなり、空の鳥が来では、単を作るほどの木になる」[2]。

1928年と同じように、今もいつも神は手段とは不釣り合いな実りをもた

らされます。神の助けが弱まること はありません。しかし、この生い 茂った木の陰に憩う人として、私た ち一人ひとりが、神の助けを受け て、できる得る限り寛大に応えるよ うお望みです。

神への賛美と感謝が心から湧き出ます。「主よ、感謝いたします。素晴らしいパンで一杯になったオーブンから、キリストの良き香り(2コリント2,15)が世界中に広がっています。地球上には、神に栄光を帰す何千万という人々がいることを感謝すべきです。すべての人々はあなたのものだからです」 $\begin{bmatrix} 3 \\ -1 \end{bmatrix}$ 。

様々な困難にもかかわらず、私たちを決してお見捨てにならない神に非の打ちどころのない感謝を捧げるべきです。主は、常に私たちと共にいてくださるのです。ですからその御前では「艱難の最中にいても、Gratias tibi, Deus, gratias tibi! と主

に申し上げ、微笑んでいなければなりません」 $^{[4]}$ 。聖ホセマリアは、ある日、心の奥深くで〈si Deus nobiscum, quis contra nos?〉 $^{[5]}$ という言葉を聞きました。もし神がまるとなるなら、誰も私たちもとないのです。挑発的手段とはありてはないた環境も、物的手段とでなるなる世俗化した環境も、物的手段とではありまする。

現代が以前より悪くなったわけではないのです。聖アウグスティヌスが注意していました。「ところでなぜ、過去のどの時代も現代より優れていたと考えなければならないのですか。最初のアダムから現代のアダムまで、人の世の営みは、茨とあざみの生えた土地で、汗を流して働くことです」^[6]。

10月2日は、私たち一人ひとりが、 神のお望みのような道具として振る 舞っているかどうかを糾明するため にもふさわしい日です。ある年のこ の日の聖ホセマリアの念祷を自分の ものにしましょう。「今朝、目が覚 めたとき、あなたたちが私の話を聞 きたく思っていると考えて顔が赤ら むほど恥ずかしくなりました。で も、心を神に向けると、まだ果たす べきことがたくさんあることに気づ きましたし、同様にあなたたちのこ とを思うと、私はオプス・デイに全 てを出し切っていないと確信できま した。神様はそうなさっていま す。」^[7]。

神様のお蔭で善意は欠けないのですが、神の賜に具体的に応えなかったこと、つまり、時々寛大でなかったことや周りの人に悪い手本になるような個人的な過ちのゆるしを願いましょう。平和を奪われることのない、快活な痛悔をしましょう。「私

たち人間がペンで書くように、神は テーブルの脚で書かれるのです。書 いたのは主であると、はっきりと分 からせるためです。これは本当に信 じがたい驚異的なことです」^[8]。

教皇様が、全てのキリスト信者は環 境や出会う人々を信仰の光で照らさ なければならないと強調しておられ ます。私たちはオプス・デイのこの 新たな年に「あらゆる人に、あらゆ る場所で、あらゆる機会に、ためら うことなく福音を告げる」よう招か れていることを痛感しましょう。 「福音の喜びは民全体のためであ り、誰も除外されてはならない| [9] からです。これは、創立者が1928年 の10年か12年か前、神の招きを予感 し始めた時から、その心に燃え上 がっていたキリストのみことばの映 しです。「Ignem veni mittere in terram et quid volo nisi ut accendatur? (ルカ12,49); わたしが

来たのは、地上に火を投ずるためで

ある。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。それに対する答えは ecce ego quia vocasti me! (1サムエル3,8); 私をお呼びになったので、私はここにいます。子どもたちよ、もう一度、主に申し上げましょう」 $\begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix}$ 。

10月2日は、主が私たちに委ねられた使命を確信するとともに、私たちがこの世にいるのは、教会の使命の一部としてオプス・デイをするためであることを、思い起こすようにとの呼びかけです。ですから、私たちは、置かれたところで、福音宣教の最前線にいることが分かります。

より多くの人々に、またキリスト教的生活の経験が無い人や信仰のない人、信仰を実行していない人たちに仕えるため、〈扇子を広げる〉時が続いているのです。大勢の人々が私たちを待っています。イエス・キリ

ストに出会った私たちの喜びを伝えてくれることを望んでいるのです。

自分の環境で、いつも、福音の喜び を告げ知らせる者としての深く現実 的な意識を育みましょう。それに は、面倒見がよく、なんでも引き受 ける覚悟で、愛情をもって、惜しみ ない心で全ての人たちとの友情を築 くことのできる男性女性であること です。単に使徒職的な活動内に限定 しないで、いつもどこでも使徒とし て振る舞うということです。そし て、子どもたちよ、これは具体的な 多くのことがらに表されます。仕事 の聖化のために実行すべき、正義、 愛徳、謙遜、他人への配慮、肯定的 な態度などを身に付けるよう真面目 に励み、一人ひとりが社会に提供で きる良い点を学び取って協力し合 い、一致を図る人として振る舞うこ とです。

私たちの使命の意味を活き活きと保 つためには、深い信心を育み、超自 然の手段とキリストの観想を支えに 行動することです。福音のメッセー ジを伝えることは、善行です。この 善行は、信者未信者を問わずより人 間らしい人にし、幸せを求める全て の人への答えを提供します。時々、 振る舞いが改善できるように、愛情 のこもった注意が相応しいなことも あるでしょう。そのため、福音書で イエス・キリストが頼まれたことが 兄弟説諭なのです。この点について は、聖年の初めの手紙で広範囲にわ たって記しましたから、このテーマ については考察しないことにしま す。ただ、創立者の見事な見識をし たためるだけにします。この慈善の 業は、慎重に、落ち着いて、謙遜な 態度で、皆がこの極めて人間的で極 めて超自然的な助けを必要としてい ることを意識して実行しなければな りません。

いつものように教皇様のためのお祈りをお願いして終わりにします。具体的には、もう始まっているグルジアとアゼルバイジャンへのご旅行と今月末のスウェーデンへのご旅行のためです。両方とも、前任の教皇様方に続く、教皇様のエキュメニズム活動の一環としてなされるものです。

私の意向に固く一致して、今月29日、助祭に叙階されるオプス・ディのメンバー31人のため、また教会の全司牧者のためにも祈ってください。

未だに深い悲しみを拭いきれずにいますが、心静かにお願いします。交通事故で無くなったメキシコの私の娘たちに思いをいたしてください。悲しみにくれているのは一致した家族だからです。それでも落ち着いているのは、世界中で心一つに捧げたお祈りのお陰です。主にお願いしま

しょう。どうぞ、彼女たちに、御身のいつくしみに見合った天国での大きな幸せをお与えください、と。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

ハビエル

ローマ、2016年10月1日

[1] 聖ホセマリア、1962年10月2日 説教 (AGP,ライブラリ、P09、57 ページ)。

[2]マタイ13,32。

[3] 聖ホセマリア、1962年10月2日 説教(AGP,ライブラリ、P09、59 ページ)。

- [4] 同上、57ページ。
- [5]ローマ8,31参照。
- [6] 聖アウグスティヌス、説教Caillau-Saint Yves 2,92 (PLS2, 441-442, 『教会の祈り』の 年間22週水曜日参照)。
- [7] 聖ホセマリア、1962年10月2日 説教(AGP,ライブラリ、P09、60 ページ)。
- [8] 同上 59ページ。
- [9] 教皇フランシスコ、2013年11月 24日使徒的勧告『福音の喜び』23 番。
- [10] 聖ホセマリア、1962年10月2 日説教 (AGP,ライブラリ、P09、62 ページ)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/zokujinkuchouno-tegami-2016-10/(2025/11/22)